



大川小学校

息子を捜し続けて5年

琴、どこへ行った

宮城県石巻市。東日本大震災による大津波が同地の大川小学校を襲って5年が経とうとしている(注)。そこには、息子を捜し続ける父親の姿があった。

写真・文／岩波友紀
Photo & Text by Yuki IWANAMI

今も残る大川小の校舎。写真はすべて、宮城県石巻市。

(注)大川小学校では地震後、校庭にとどまり続け避難が遅れたことで児童たちは津波にのまれてしまった。児童23人の遺族は学校側が安全配慮義務を果たさず過失があったと、市と県を相手どって提訴した。第三者の事故検証委員会は、避難開始の意思決定が遅く、避難先を河川堤防付近としたことが事故の最大の直接的要因とする最終報告書を出しているが、なぜそうなったのかという核心の原因は明らかにされていない。



永沼さんは毎月、月命日に近い日に必ずお墓に手をあわせる。
2013年



捜索の合間にうつむく永沼さん。
長年の疲労と落胆が限界まで積もる。2014年

**卒業式までに
なんとか見つけた**

宮城県石巻市で2015年3月、パ
ワーショベルを動かす永沼勝さんの
手が止まった。操縦席から降りて、掘
り出した青い布を確認すると、それは
津波で未だに行方不明となっている長
男・琴君が通っていた石巻市立大川小
学校の校旗だった。「明日卒業式です
よ、このタイミングで……。俺の捜索
もうすぐピリオドかな……」

しかし次の日、永沼さんの表情は晴
れ渡った空とは対照的だった。卒業ま
でにどうしても見つけてやりたいとい
う願いは叶わなかった。

東日本大震災当日、2年生だった琴
君は多くの同級生らとともに津波に流
された。同校の児童74人が犠牲となる
大惨事。琴君を含む4人がいまだに見
つかっていない。それから今まで、永沼
さんは毎日、琴君を捜し続けている。

震災当時、大型トラックの運転手だ
った永沼さんが、仕事をしていた内陸
から大川小にたどり着いたのは2日
後。多くの児童の遺体を目にしたが、
琴君はいない。スコップを持ち、水没
した街を歩き続けた。小学校のある釜
谷地区から海の方にある長面地区は道
路がなくなっていたが、その先の自宅
のある尾崎地区まで歩きまわった。兼
業で漁師をしていたため、所有する小
型船でも捜したが、見つからなかった。

琴君のランドセルやピアノカは学校近
くで見つかった。濡れたランドセルを
背負って帰ると疲労と思いがのしかか
り、ベルトが肩に食い込んだ。「必ず
見つけてやつからな」と、仕事も辞め
捜索を続けた。

人力での捜索の限界を感じ、翌月か
らは重機に乗った。仕事柄免許を持っ
ていた。平坦な陸地だけでも約400
ヘクター。大川小周辺の広大な土地
を、1か所の見逃しのないよう少し
づつ掘り返してきた。山の斜面、山をひ
とつ越えた小さな湾、そばを流れる富
士川。重機で入れるところは掘り続け
た。漁船を借りて北上川の底をすくい、
海にカメラを入れて捜してきた。

12年に、永沼さんは仕事に復帰した
時期があった。琴君を捜すことだけに
時間を費やしてきたが、妻や次男に対
してふつうの父親がするようなことを
してあげられないという後ろめたさを
つねに抱えていた。震災前勤めていた
運送会社に復帰するのが決まると、踏
ん切りのため琴君の死亡届を提出し
た。しかし、仕事が休みの日だけ捜索
するという生活は、予想以上にきつか
った。仕事でトラックを運転している
と、考えるのは「こんなところでなに
をしているんだろう」ということだけ。
怖い思いをさせて、今でもひとりで
いる琴君のことしか頭に浮かばない。そ
れでも現実的に生活費も稼がねばなら
ない。考えた末、捜索を請け負う土木



琴君の代わりに写真を手に大川小
の卒業式へ出席した。2015年



卒業式前日に見つけた大川小の校旗。2015年



山道を越え、港で手がかりを捜す永沼さん。2014年

会社への転職がなかった。その会社の理解で、仕事もかねて捜索ができるようになった。

もう一度、琴君を抱きしめるまで

地震と津波により220ヘクタールが水没し海の底となった長面地区周辺は、段階的な堤防建設と排水作業がおこなわれてきた。陸地が現れると、そこに捜索に入った。残っていた100ヘクタールの排水がようやく終わり、捜索が始まったのは震災から4年以上たった15年7月。最後の広い未捜索の場所として期待が大きいところだったが、11月いっぱいでの市の計画による捜索期間は終わり、市による大川小周辺の捜索はこれで全て終了となった。

琴君がどこにいるかは誰にもわからない。「絶対にここにはいない、という場所を少しずつ増やしていくしかない」と、永沼さんはいつも言っていた。その確証がないところはまだまだ多く残るという。震災後すぐの混乱の中で、捜索で完全ではない場所や、仮道路のために埋められた場所。手つかずの沼や川、海がある。重機を借りるなどの個人資金は心もとなく、義援金などを頼るしかない。

震災から時間が経つにつれ、現場からは人がほとんどいなくなっていた。「復興」の言葉ばかりが溢れていた。それから震災そのものの記憶も薄れ、



津波を受けた自宅は残ってはいるが、災害危険区域に指定されているため、住むことはできない。「思い出してつらくなる」からと、永沼さんは琴君の部屋にはあまり入らず、手をつけていない。2013年

過去の出来事のように扱われるのに時間はかからなかった。そしてもうすぐ5年の月日が経つ。復旧など可能なのだろうかと思えるほどに水没した長面地区も、一部稲作がおこなわれるまでに変化した。見た目は確かに時間が経過している。しかし、永沼さんの時は止まっている。「今日も見つからないかった」という落胆を来る日も来る日も味わうだけ。琴君が見つからないければ、たった一步でも前に進んでいない。

「かわいぐねっすか？ 親ばかだっど……」と、携帯電話に残る琴君の写真を見せてくれた。家の裏山を駆け登り、目の前に広がる長面浦に飛び込んで泳いでいたやんちゃな男の子。海を見ていると一緒に船に乗って釣りをした記憶が鮮明に蘇る。朝2時に漁に出る時でも、必ず起きて、「おとう、いってらっしゃい！」と言ってくれていた琴君。震災前日、永沼さんより早く家を出る琴君が、なぜかその日だけ家の前でいつまでも手を振っていた。「遅れっから早く行け」。そう言った。あの時、抱きしめてやれていたなら。その後悔が頭から離れない。どんな姿でも、もう一度琴を抱きしめたい。

いわなみゆき
1977年長野県生まれ。大手新聞社のフォトグラファーを経て、フリーランスのフォトジャーナリスト。福島市を拠点に、東日本大震災と福島第二原発事故の取材を続ける。オンライン新聞「The PHOTO JOURNAL」主宰。DAYS JAPAN 2015年6月号に、「ネパール大地震」掲載。



長面地区を重機で搜索する永沼さん。2015年

